八田與一のこと

はったよいち

藤鈴蝸（ふじすずか）

八田與一という人

今回は風変わりな銅像を紹介します。

作業服姿で片ひざを立てて地面に座り、髪をいじりながら考えにふける姿。作られた当時は実際に地面に直接置かれていたのですが、彼の視線の先には自然の湖のような美しいダム湖・珊瑚潭（さんごたん）があります。この人物の名は「八田與一」。その銅像は台湾にあります。

台湾の南方に嘉南（かなん）平野と呼ばれる広い平野があります。そこは昔、作物の育たない不毛の地と呼ばれていました。そこに住む人々は貧しく不便で、しかもマラリヤやアメーバー赤痢などの伝染病に苦しめられる生活を長年続けなければならない状態でした。

そこに、大正の終わりから昭和のはじめにかけて、日本人と台湾の人々の手によって「烏山頭（うさんとう）ダム（そのダム湖が珊瑚潭）」と、そこに水を溜めるためのトンネル、またその水を田畑に注ぐための給水路と、排水路が作られました。このダムとトンネル・給排水路全体を含めた水の設備は「嘉南大圳（かなんたいしゅう）」と呼ばれています。

この設備のおかげで、嘉南の地は豊かな作物の実る台湾最大の穀倉地帯へと生まれ変わりました。その広さは東京二十三区の二，五倍、香川県と同じ広さになります。

その世界有数の大規模土木工事と、その後の農業のあり方を計画し、実際の工事の先頭に立ったのが「土木技師・八田與一」でした。彼の銅像は戦争などの危機の中でも、現地台湾の人々によって大切に守られました。現在もダムを見下ろす山の上に大切に安置されています。しかも命日の五月八日には多くの台湾の人々が集まり、お墓の前で感謝の想いを込めての供養が行われています。

八田與一の名を知る人は、今の日本人の中にはあまりいないかもしれません。しかし台湾では中学校の歴史の教科書にも載せられ、台湾を愛し救った偉大な業績と人柄は、人々の間に代々伝えられています。

今回はこの八田與一という人物について学んでいきましょう。

志

「志」とは何でしょう。下村博文文部科学大臣は渡部昇一教授との対談の中で、次のように語っています。

「私が一番危惧（きぐ）していることは、日本人に志がなくなってしまったことです。志なんて今の若い人の間では、ほとんど死語になっているのではと思います。自分のためだけに生きるというのは志ではないと思うんです。やっぱり自分が人のため、社会のため、国のためにどう貢献するか、そのためにどう生きるのかということが志だと思うんですけれども、その志というものが、この国からなくなりつつあるのではと憂（うれ）いているのです。」

では八田與一自身、また彼が生きた時代の日本人はどうだったのでしょう。

明治の日本は近代的な国を造り上げるために、先進国から多くの知識や技術を取り入れる必要がありました。そのための第一段階としては、外国から優秀な先生を招き、日本の学生たちに教えてもらうという方法をとりました。次には優秀な日本の学生を先進国に留学させ、帰国後日本の学生の教育に当たらせるという方法をとりました。

日本の土木工学の基礎をつくった古市公威（ふるいちこうい）もそのような留学生の一人でした。彼の猛烈な勉強ぶりについてはこんなエピソードが残っています。

留学先のパリで、古市は寝る時間も食事をする時間さえも惜しんで勉強に励んでいました。あまりの猛烈ぶりを見るに見かねた下宿先の女主人が「少しは休んだらどうですか。」と声をかけました。すると古市は「自分が一時間休めば、日本が一時間遅れる。」と答えたそうです。この古市は與一が学んだ大学の教授でした。

広井勇という人は與一の恩師と言うべき先生でした。広井自身、北海道に鉄道をひくことや、港を築くことに力を尽くした人でした。広井教授はよく学生に「橋を架けるなら、人が安心して渡れるような橋を造れ。工学はそれを使う人たちのためにある。」と語っていました。彼が最も嫌っていたのは、地位や名誉のために仕事をする出世主義でした。

広井教授は與一の先輩である青山という学生のことをよく話しました。青山は「自分は生涯に一つでいいから、人類のためになるような仕事をしてから死にたい。」とパナマ運河建造という大工事に参加するために、アメリカに渡った人です。貧乏だった彼は、広井教授に書いてもらった紹介状と洗面用具だけを持ち、運賃を安く上げるために船の甲板洗いをしながら海を渡りました。運河完成後、体験を基に書いた本は多くの土木関係者の貴重な資料となりました。

そのような雰囲気の中で学んだ與一は「官位や地位のために仕事をするのではなく、人類のためになる仕事、後の世の人々に多くの恩恵をもたらすような仕事をしてみたい。もしそれができれば、一介の技術屋で終わっても十分だ。」と考えるようになりました。

そして大きな仕事を成し遂げるためには、最先端の知識と技術を身につけなければならないと、学問に熱中しました。原書を片っ端から読破し、自分の考えをまとめるという習慣を身に着けました。アイデアも豊かで、それは過去の事柄をすべて調べ上げたうえで、自分自身で創作したものを提案していくというものでした。そのユニークさは、既にあるものの表面を少し変えるだけではなく、根本からひっくり返したようなものである、という点にありました。

周囲の中には與一の独創性について行けず、「八田屋の大風呂敷」と陰口をたたく人もいました。しかし広井教授をはじめとする、理解者たちは「八田には日本の中では狭すぎる。彼を生かすには外で仕事をさせるのが一番だ。」と、当時日本の植民地となり、土木開発が進められ始めていた台湾への道を開いてくれました。

與一自身も「広井先生や青山先輩のように、自分を生かせる土地へ行ってみよう。そこで、人のためになる仕事をしてみたい。存分に仕事ができる土地であればどこでも良い。まずは行くことだ。」と台湾への船に乗りました。

不毛の大地

嘉南平野の年間降雨量は二千五百ミリ。東京が千五百ミリですから、年間の雨の量としては十分なものがあります。

しかしこの雨は五月から九月までの雨季に集中して降り、集中豪雨となります。それは洪水を引き起こし、河川は氾濫し、田畑は水に浸され、人々のすむ家さえも水漬けのような状態になりました。

反対に秋冬の乾季には一滴の雨も降らないというような状況で、土地は乾燥し、季節風が吹くと砂塵が舞い上がり、人々は飲み水さえ手に入れることができなくなりました。

平野の東寄りに一本の鉄道が走っていました。その鉄道の東側、山に近いごくわずかな土地だけは水田で米を作ることができました。鉄道より西の広大な面積の平野は、天候しだいで雨が順調に降ったときだけ水田になる土地か、少しの水で育つ落花生やサトウキビ畑が所々にあるだけでした。これさえも小さなため池や小川の水だけが頼りという心細い状況でした。

海岸に近い地域の状況にはさらに厳しいものがありました。台湾海峡から吹き込んでくる潮風と、砂を通して滲み込んで来る塩分を含んだ水によって、植物は育ちません。土地の表面は塩のせいで雪が積もったように白くなるという塩漬け状態でした。

與一が訪れたころの嘉南の地は、洪水と干ばつ、そして塩害の三重苦が支配する不毛の大地だったのです。

苦しむ農民

そのころ日本が台湾に対して特に力を入れていたのは、当時台湾に広がっていたマラリヤやアメーバ赤痢をなくするための衛生に関する事業でした。與一もそのための上下水道整備の仕事をしました。やがて発電や灌漑事業（田畑に水を回すための事業）を担当するようになり、実力を認められるようになっていきました。

発電用と灌漑用のダム作りのための現地を調査していた與一は、ある朝、海岸に近い平原を馬で回ってみました。

そのとき、水筒に水を入れ忘れた與一は、近くの粗末な農家に立ち寄り、水をくれるように頼みました。すると、

「今はないが、昼ごろには水汲みに行っている者が帰って来るから、それまで待ってくれ。」と言います。「水はどこまで汲みに行くのか。」と聞くと、「曽文渓まで四、五時間かけて行ってくる。」さらに「井戸は無いのか。」と尋ねると、「井戸はあるが、今は乾季なので水は無い。二、三時間待って染み出てくる水は、桶一杯分も無い。汲みに行くほうが早い。」と答えました。

このように作物を作るための水どころではなく、飲み水を手にすることにすら苦労する農民の姿を目の当たりにしたことが、與一が大規模な灌漑計画を設計し、実施するきっかけとなりました。

セミハイドロリックフィル工法

與一が造った烏山頭ダムに初めて訪れた人は、教えられるまでそこがダムだとは気づかないと言います。そこに見えるのは、「珊瑚潭」（複雑に入り組んで湖の上に顔をのぞかせている山々が、まるで珊瑚の樹のように美しい湖）という名にふさわしい景色と、美しくなだらかに延々と続く丘です。実はその丘こそがダムの堤防であり、美しい湖は人造湖なのです。

一般にダムといえば、谷あいに高々とそびえたつコンクリートの壁を思い浮かべます。しかし與一の建設したダムは、中心部の芯になる部分だけにコンクリートを使い、後は粒の大きさや性質の違う様々の土を使い分けながら、水の力を使って土手を固めていくという方法で築かれました。ですから完成した堤防の表面にはコンクリート部分は見えず、まるで自然の丘のように見えるのです。

この地にはコンクリートダムを築くために必要なしっかりした地盤はありませんでした。また台湾は地震のよく起きる島です。台風もよく襲来する島です。與一はそれらの厳しい条件の下でも長くその働きを続けられるダムを建設しようと考えました。（実際に同時期の作られたコンクリートダムが、堆積物のために使えなくなっているのに対して、烏山頭ダムはその機能を十分に果たしています。）そこで與一が採用した工法が、このセミハイドロリック工法と呼ばれるものでした。

この方法は当時、日本でも東洋でも誰も試みたことの無い方法でし

た。ダムの先進国であったアメリカにいくつか例はありましたが、與一が設計したような、高さ五十六メートル、長さ千二百七十三メートルという大規模なダムをこの方法で築くことなど、例の無いことでした。

果たしてそんなことが可能なのか。疑問の声も多く上がりました。それに対して與一は、

「やれないことはない。現にアメリカには、小さいけれどもこの方法で完成しているではないか。アメリカ人にできて、日本人に出来ないはずはない。何事でも初めて試みることに人々は反対するものだ。やり遂げない限り、信じてもらえないものだ。断固として、やり遂げなければならない。そのためには、アメリカに行って、実際に見てくるしかない。見て確かめれば、周りの者の不安を消し去ることができるはずだ。」

と、アメリカに渡りました。

與一はアメリカで実際にセミハイドロリックフィルダム工法で作られたダムを見学し、現地の技術者と意見を交わし、成功の鍵になる土の性質を手にとって確かめて、自分の設計の裏づけを得たのでした。

またこのとき、自分が考えていた水を流すトンネルの設計については無理があることを学び、あっさりと計画を変更しています。

この渡米のもう一つの成果は、大型土木機械の購入でした。嘉南大圳の工事は、方法と規模の点で画期的なものでしたが、東洋ではじめて大型土木機械を導入したという点でも画期的なものでした。

大型土木機械の購入についても、莫大な費用がかかること、機械を使いこなせる技術者が日本にまだいないことから反対の声がありました。しかし與一は、

「これまでの人力に頼っているだけの工事では、二十年たっても完成しない。工期が遅れれば、大地は不毛のまま眠り続けることになる。早く完成すればそれだけ早く大地は金を産む。機械はこの工事の後も使える。第一、使いこなせる技術者が育つ。そして、それを造る技術も会社も産まれてくる。」

と、機械の購入を推し進めました。

実際、工事は十年で完成しました。初めは使い方がわからないと騒いでいた現場技術者も次第に腕を上げました。しばらくしてやって来たアメリカの機械メーカーの技術者が、「教えに来たことが恥ずかしい。アメリカ人よりうまいぐらいだ。」と帰っていくまでになっていました。

農民のための工事

もう一つ計画には問題点がありました。それはいくら二つの水源から水を引いてきても、嘉南全域に給水するだけの水の量をダムに溜めることはできないということでした。それについて、もっと工事の規模を小さくして、給水できる範囲を狭めて行うべきではないかという意見が出されました。しかし、與一はやはり嘉南の地全域に水がゆき渡る工事をするべきだと主張します。なぜか。

「これは私の技術者としての意見というより、百姓出身の考えかもしれません。規模を小さくすれば、給水を受けられる面積は半分足らずになるでしょう。確かに給水される地域は毎年米が取れるようになるでしょう。しかし給水を受けない土地は不毛のままで終わり、米はおろか、サトウキビさえろくに獲れない状態が、永久に続くことになります。給水を受ける農民は収入も増え、豊かになり、その地域だけは近代的な農業が行われるようになるでしょう。そうでない農民には封建的な農法がいつまでも続き、貧しさから脱却することはできません。同じ嘉南に住む農民が、住んでいる場所の違いだけで、富める農民と貧しい農民とにはっきりと二つに分けられてしまうことになります。これは台湾の将来のために決して良いことではないと思います。私は農家の出身ですが、耕しても耕しても作物のできない土地に住む百姓ほど、みじめな者はおりません。

私はそこで、嘉南平原を二つか三つに分けることを考えました。そこに一年ごとに交代で給水すれば、嘉南の農民すべてが平等に水の恩恵に預かれます。そうすれば二つの水源で十分間に合います。水が来る地域はその年は米を作り、来ない地域はサトウキビや野菜を作れば良いと思います。現在、米の価格が高いため農民はサトウキビを作るのを嫌がります。そのため台湾の砂糖産業は原料の供給が思うように得られずに悩んでいます。その解決にもなるし、第一、嘉南の農民が

近代の農法とはどのようなものか知るようになります。
ダムの水は、それを必要とする農民全員に平等に与えられるべきです。嘉南で暮らす農民全員に水の恵みを与えるためには、嘉南全域に灌漑するほか道はないと思います。」
まさに学生時代に学び志した「工学はそれを遣う人のために」「人類のためになる仕事、後の世の人々に多くの恩恵をもたらすような仕事」の実現に乗り出そうとする覚悟の表れでした。
與一の提案した年毎の給水場所の変更は、後に「三年輪作給水法」と呼ばれ、多くの日本人農業技術者の多大なる努力によって、新しい農業を知らず、古い考え方・習慣や制度に縛られていた現地の農民たちに伝えられ、実施されることになります。
與一の膨大なスケールの計画にはその後も様々な反対意見が出されました。しかし多くの理解者と、実現を望む現地台湾の人々から寄せられた多くの要望書に後押しされ、当時最高責任者だった下村長官の次のような言葉を導き出すことになったのです。
「問題は多くある。しかし、恐れていては何もできない。恐ろしいのは、工事や輪作制実施の難しさではなく、遂行しようとしない我々の怠惰な心だ。諸君、やってみよう、台湾の将来のために。」

人々と共に

嘉南大圳の計画をほぼ立て終えたころ、與一は金沢に住む外与樹という女性と結婚しました。
新婚旅行を終えるとすぐに、二人は台湾に住むことにしました。当時の台湾には、日本の手によって少しは街づくりが始まっていましたが、日本に比べるとまだまだ未開の地でした。先に書いたように伝染病が蔓延していました。金沢からは十日近い日にちをかけなければたどり着けない土地でした。そんな中で二人は、日本人よりも台湾の人々が多く住んでいる地域に、家を借りて住むことにしたのです。
ある友人が「日本政府の技師たる人が、あんな所に住むのは良くないよ。」と忠告しました。すると與一は「台湾を知るには、台湾の人に学ぶのが一番良いと考えている。」と、「台湾の人も、日本の人も同じじゃないか。」と言いたげな顔で答えたそうです。與一は権威をち

らつかせたり、格好をつけたり、地位だ身分だと人を差別するような人ではありませんでした。
嘉南の工事の運営のために、地元で組合が作られました。日本の役人として高い地位にあった與一ですが、工事に専念するためにその地位を捨て、組合の技師となりました。また妻と共に、山奥だった工事現場に移り住み、二人の子どもも育てています。
このような與一の考え方は、工事で働く人々の上にもいかされました。
與一は工事で働く人々が、家族と共に暮らせる宿舎作りを計画しました。こんな未開の土地に家族連れで移り住み人がどれだけいるのだろうか。家族連れとなると、学校を初め多くの施設を作らなければならない、そのためにまた多額の費用が必要だ。そんな反対の声もありました。
それに対して與一は、「この工事には一つの失敗も手抜きも許されない。」そのためには「全員が心置きなく仕事に取り組めるようにしなくてはいけないのだ。だから毎日家族の顔を見られることが必要なんだ。家族の心配をしながら、良い仕事はできない。」と、家族ぐるみの宿舎作りを強く推し進めました。
そこには学校、病院をはじめ、生活に必要な物が買える購買部、そしてテニスコートやプールまで作られました。一つの「街」が出来たのです。台湾の人々も利用しました。そこで商売をする台湾の人もいました。時折催された映画上映会には、台湾の人も日本の人も、家族ぐるみでやって来てみんなで楽しんだそうです。工事の従業員・関係者は、すべての人が「家族」でした。
衛生面の向上にも気を使った與一は、マラリヤの当時唯一の特効薬であったキニーネを飲むことを人々に勧めました。しかし人々はこの苦い薬を飲むことを嫌がりました。特に台湾の人々の抵抗は強かったといいます。そこで與一は一軒一軒家を回り、一人一人の口の中に薬を入れました。
やがてこの「街」のマラリヤは激減しました。台湾の人々も「自分たちの健康のことを真剣に考えてくれているんだ。」と知り、積極的に協力するようになりました。

興一が中心となって進めてきたこの「街」づくりは、現在の台湾の街の基礎となっています。このとき造られた「六甲尋常高等小学校」は、木造からコンクリート造りと変わりましたが、同じ場所で現在も使われています。

大爆発事故

これだけ大規模な工事となると、やはり何度か試練にあいました。

その一つがトンネルを掘る作業中に起きた大爆発事故でした。興一が現場に駆けつけたとき、火はすでに鎮まっていましたが、トンネルから運び出される遺体の数は五十体に及び、重傷者が数名うなり声を上げている状態でした。

爆発は、地下から噴出した石油ガスにランタンの火が引火したことによるものでした。

興一は工事中の不慮の事故により、犠牲者が出ることを何よりも恐れていました。どのように立派で意義のある工事であるにせよ、人の命と引き換えにするようなことだけはしたくなかったのです。それが五十名以上の人命が、暗い地の底で失われたのです。これ以上の犠牲者は出したくありませんでした。

計画や設計に無理があったのではないのか。もう工事は中止したほうがよいのではないか。そんな声も上がりました。

興一は自分に非難の声が寄せられるのは当然だと思いましたが、今現場の人たちのやる気がなくなるのが一番恐ろしいことだと考え、先頭に立って工事の指揮を続けました。そして原因の究明を徹底しました。また犠牲者の家族を見舞い、台湾式の方法で手厚く弔意を表しました。

嘉南の農民たちは興一が工事から手を引くのではないかと心配しました。それほどに興一の落ち込みようはひどかったのでしょう。そんな時、興一のもとを訪れた犠牲者の家族から「決して工事から手を引かないで欲しい。今工事を中止したら、嘉南の農民たちは水の無い生活を続けることになる。死んだ者のためにも、是非工事を完成させて下さい。」と諭され、一日も早い工事の完成を誓いました。

リストラ

もう一つの大きな試練は、工事費用のための資金ぐりの悪化でした。それに決定的な打撃を与えたのが、関東大震災でした。復興資金を作るため、日本からの資金が大幅に削減されたのです。

工事を進めていた興一のいる組合では、工事を一時期縮小し、半数に及ぶ人員をリストラするより他にとるべき方法がなくなってしまいました。

興一は誰を解雇するべきか、悩みました。給料が払えない以上、いつまでも働かせるわけにもいきませんでした。悩みに悩んだ末、辞めてもらう人々のリストを作り、各工事担当の責任者たちに見せました。それを見た責任者たちは驚きの声を上げました。

「退職者の中には、有能な者がかなり含まれています。この者たちより、他の者を解雇した方が、現場としては有難いのですが。」

興一は静かに答えました。

「私もいろいろ考えた。確かに、力のある者を残しておきたい。しかし、能力のある者は、他でもすぐ雇ってくれるだろうが、そうでない者は再就職するのはなかなか難しい。今、これらの者の首を切れば、家族ともども路頭に迷うことになる。だから私は惜しいと思われる者に辞めてもらうことにした。その穴は、君たちが残った者を教育して補ってくれ。辞めさせる以上、辞めていく者の就職口は、必ず私が見つけてくる。君たちも苦しいだろうが、私も苦しいのだ。」

興一は、退職者一人一人に賞与金を渡しながら、大粒の涙を流し、涙声になり、そしてもはや立ってさえいられないような状態になりました。そして「工事が再開されれば、一番に君たちに帰ってきてもらう。」と約束しました。

そして実際に退職者のため、良い給料の出る職場を自ら探して世話をしました。その様子を見ていた人々からは、「八田所長を信じて付いていけば、私たちのような者でも決して見捨てられたりはしない。」と、より厚い信頼を寄せるようになりました。

やがて悪夢のような時期は去りました。資金繰りのめどがたち、工事は再開されました。退職した者たちも大部分がこの烏山頭に帰って来ました。烏山頭は再び活気を取り戻すことが出来ました。

神の水

十年の年月の末、ついにこの大工事は完成しました。

大地を潤す水を目にした嘉南の農民たちは、「神の恵みだ。神の水だ。神の与えたもうた水だ。」と歓喜の声を上げました。

その後も日本の農業技術者の努力があり、嘉南の地は台湾最大の穀倉地帯、豊かな大地に生まれ変わったのでした。

工事終了後、與一は工事期間中に亡くなった従業員やその家族を弔うための「殉工碑」を立てました。その石版には百三十四名の名前が、日本人、台湾人の区別無く、亡くなった順に刻まれています。

組合は解散となりましたが、與一は部下の再就職のために奔走しました。「八田技師が推薦するなら間違いない。」と、どこでも良い条件で雇い入れてくれました。これだけの大工事を成し遂げた者たちは、みんな優秀な技術を身につけていたのです。

飲水思源（いんすいしげん）

中国には飲水思源という言葉があります。水を飲むときには、その井戸を掘った人のことを思い、感謝して飲むことが大切だという言葉です。

台湾の人は語ります。「西欧人は嘘つきと言われることを最も嫌がり、日本人は恥知らずと言われることを恐れ、台湾の人々は恩知らずと言われるのを最も嫌う。」と。

固く遠慮をした與一を、「台湾の人々のためだから」と説得して銅像を作り、激動の時代の中でも銅像を守り続け、與一の死後、命日には一年も欠かすことなく墓前祭を続け、子や孫たちにも語り続けようとする台湾の人々の姿は、賞賛してもし尽くせないものがあります。

そして東北大震災のとき、台湾の人々はいち早く、しかも驚くほど高額の支援を送ってくださいました。私たち日本人は、その恩を決して忘れてはならないでしょう。

日本精神

與一の生涯を記した「台湾を愛した日本人」の著者・古川勝三氏はそのあとがきを次のような言葉で締めくくっています。

「戦前の日本人は決して豊かではなかったが、精神的な強さを持っていた。『公に奉仕する精神』を持って学問に励んだ若者も多くいた。何よりも誇りをもった日本人が多くいたように思う。

かつて台湾に住んでいたとき『あなたは日本人だから、日本精神を持っていますよね。』と台湾人に聞かれたことがある。『日本人精神？それはどういうことですか』と聞き返すと、『日本人精神はね、〔嘘をつかない〕〔不正なお金は受け取らない〕〔失敗しても他人のせいにしない〕〔与えられた仕事に最善を尽くす〕この四つですよ。日本は良い教育をしてくれました。今日の台湾の発展は、この日本精神のおかげですよ。』と語った。話を聞いて、返す言葉を失った。（中略）

国際化の大きなうねりの中で、今日ほど『日本精神』を持った有為（ゆうい）（才能があり、役に立つ様子）の人材が求められ時代はない。このような時に、今日の日本人に求められる資質は、八田技師の考え方や生き方の中にあるように思えてくる。できるだけ多くの日本人、とりわけ青少年に八田技師のことを知ってもらい、目先のことではなく、人類のためになる仕事を希求するよう、今のうちに修練を積んで欲しいと願わずにはいられない。」

多発する諸問題に直面している国際情勢の中、今日本のあり方が問われています。日本はどうあるべきか、日本人はいかに生きるべきか、学ぶべき点は多いと思います。